

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第56巻第3号 2021年3月

Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY

Vol.56 No.3 March 2021

《論 説》

反省的価値の体系

九 鬼 一 人

The System of Reflexive Values

KUKI Kazuto

認識論／価値論に臨むリッカート哲学の射程を、価値体系の議論を織り込みつつ探ることにしよう。リッカート哲学において、決断性は実践性に、非完結は多元性に、可謬性は反省性に改竄できることを論じた九鬼 2019 の姉妹編となる論攷である。

前論攷で述べたように——リッカートの認識論は、社会的実践に焦点を結ぶゆえ、しばしばフィヒテ主義と呼ばれる¹。フィヒテ的な実践理性の優位である（実践性）。当該フィヒテ的認識論を、おのが自身への働きかけによる定立によって総括してよいなら、その原理は一種の決断に集約される。ここで「意識一般」と命題価値という二極を、その認識論にいっしょにもち込むならば、どちらが認識論的試金石となるかが不分明となって、両者の連関が没論理に陥る。だがポジティブに見れば、理論的原理と

1 H. Rickert 2018, Bast版全集Bd.2/1, S.335.及びAnm.273.を見よ。

非理論的原理の組み合わせは、価値原理の多元性を意味している(多元性)。ただし後で見るように、論理的無底——可謬性という隘路は、認識の審級に未決定をもち込んでしまう。したがってそこでの省察は、高次のものへと上昇しつつ、おのれ自身へと立ち戻る経路をたどらねばならないだろう(反省性)。

片や本論致で新たに論じるように、価値論においては、理論的領域から非理論的領域にわたる理性が、多元的原理に与るばかりでなく、自己に回帰する反省性をもって、その現実的・可能的な総体性を組み立てているのである。

一、内在と超越／認識論

宗教的超越は、リッカート哲学の非反省的限界を表わしているのではないか。これに関連して、垂直的な総体性が、〈根拠の問いという、内在と超越の問題系〉にかかわることに焦点を結ぼう。

A. 可謬性

リッカート認識論²における、可謬性から反省性への理路を見てみよう。リッカートは、意欲する人間にとっての義務意識の妥当を、意志の決断に委ねた。すなわち認識は事行 [= Tathandlung] にもとづくとし、そればかりか論理的自律の概念は、道徳的自律の概念に下属するものとする(フィヒテの『道徳学の体系』1798の影響)。リッカートは実践理性の優位から確信 [= Überzeugung] に説き及び、『判断力批判』の影響下、衝動に対応する感情的契機(「明証感情」)に枢要な位置を与えた。『認識の対象』(第一版1892／第二版1904)においては、この優位に則して、知的良心を倫理のカテゴリーに組み入れた。つまり存在(現実性)と価値との間の、理論理性では解決のつかない問題に、実践的立場からアプローチしようとしたのである。そして判断必然性を実践的な当為的必然性として捉え、真理と意志は、明証感情によって

2 未刊の『ドイツ哲学事典』(ミネルヴァ書房、九鬼執筆担当)の原稿を参考にした。フォントのポイントを下げた部分である。

橋渡しされるとした。実践的働きという見地から判断を考察すると、それは、判断作用による真理価値の「承認」（のちには虚偽価値の拒斥を含む）という内在的意味をもつ振る舞い・態度 [= Verhalten] とされる。ただし当該著作第二版まで真理価値を当為として捉えていたが、とくに「認識論の二つの道」（1909）を機縁に、『対象』第三版以降、それを「超越的」意味として把握しなおす。すなわち肯定判断「P」は、「Pだろうか」という仮想的な問いに対する「承認」である。そのさい、実践的でもある自我極つまり評価主観（認識論的には判断意識一般）は、「P、その通り」という「超越的」意味に対する態度決定を提示する。G. Gabriel & S. Schlotter 2013によれば、フレーゲのごとき規範的な断定を考え、〈ロツツェ＝フレーゲ〉ラインの判断論に与したのである。

或る経験と並列しうる潜在知は、つねにその背後で蠢動している。リッカートが直接そのように表現している箇所は見つけにくい。とはいえ、認識の決断性と、その裏返しである懐疑性との両義をもつものを、可謬性と呼ぶのなら、それを止揚するかたちで、リッカートに「反省」の境地がひられることを論じたい。

カントは、超越論的对象Xは多様なアスペクトに対応して、「本」「一枚一枚の紙」「文字というもの」のようにまとめられるとした（中島 2008、90-91頁.）。カントを継いで、リッカートは、Xによって「まとめられた」膨大な可能性を考えている。これが、前景経験の背後に潜在する知が蠢動していることの意味である。例えばリッカート自身の例ではないが、——判断「雪は白い」は、「これは白い雪です」とも、「ここでは白い雪でスキーができます」とも、言いかえることができる。目の前 [= vorhanden] という条件では「これは白い雪です」、手の元 [= zuhanden] という条件では「ここでは白い雪でスキーができます」等々を、リッカートは膨大な経験の可能性の一部として考えた。つまり彼は、〔並列しうる知という〕可能性のうちから、既知を截り出すわざによって、内在的領域を立ち上げるという構図をとっている。ここでの黒子は、カントのアポリアを引き受けたフィヒテということになろう。——このアンチノミーを解消するのは、主意主

義的決断である。その点、決断論的である。だがしかし、客観的な命題価値=妥当を立てつつも、なお主観領域に決断を設定するなら、妥当は不可知論的（物自体的）位置価値をもつことになり、懷疑論を防圧できない。こうした決断論と懷疑論のせめぎあいを、可謬的と筆者は呼んだ。カント的に解釈するなら、このことは価値領域の相克という弁証論的構図のもとに収められる。すなわち理論理性の越権によるかぎり、既知ならざる「背景」の蠢動をつうじ、認識は二律背反に脅かされるのである。弁証論がリッカート哲学で臨界を迎える局面である。

B. 宗教性

一、実際リッカートは、弁証論的問題を解決するよすがを、或る種の超越に求めているようでもある。彼は『近代文化の哲学者カント』（1924）で言う、「〔弁証論という〕その問題を論究することによって、宗教哲学的問いの論究を頂点とする包括的世界観学のための基礎が置かれるのである。数学や物理学についての理論は、そのための準備にすぎない。根本問題はこうである。すなわち、私たちは世界や神性の「本質」について何を認識することができるか」（MK S.153. 傍点は原文ゲシュペルト）、と³。

二、愛や聖に焦点を結んだゲーテ読解（『ゲーテのファウスト』1932）では、愛の領域を、形而上学的超越の高みとの連続において考えている（男女の愛の内在的総合）。その文脈で現世的な男女の愛が、彼岸へと架橋する価値的な高さをもって理解されている。

三、形而上学をめぐる思考が、学の限界を徴づける。学はあらんかぎりの完結を目指す。しかしそれは内在的にのみ成し遂げられる。だから形而上学的な統一（超越的総合）は望むべくもない。せいぜい哲学体系という内在的総合が望めるだけである。「もちろん世界本質を理論的に把握すること、そればかりか概念を以て神性を的確に認識せんとすることを、学であ

3 リッカートの価値哲学における、存在ネオプラトニズムという、その論理-形而上学的性格にA. Giugliano 2016は言及している。同じくVgl. J. Hessen 2015（←1919）、S.34-35.

る哲学は断念せざるをえない……」(MK S.162.)。

リッカーは神の名を呼ぶ。第一には弁証論的に、第二には愛の超越において、第三には主知主義的体系の外部に穿つものとして。こうして全世界(包括的価値体系)へと問題領域が拡張されるとともに、彼は弁証論的な構えに出会わざるをえなかった。そこでラスクの領域範疇を模した原始述語——「現実的」「イデアルな」「妥当的」に並ぶ——「超感性的に現実的(=形而上学的)」の考察(LPr S.87.)をスプリングボードにして、晩年、〈形而上学的なもの〉の象徴的⁴把握へと力点を移してゆく。

これに先駆けること、『認識の対象』第三版(1915)中、Gottの用例は四箇所ある。うち積極的に神が論じられるのは二箇所。D S.90-91, Anm.ではキュルペを受けて、認識論の埒外にある神を宗教的信仰の問題とする。D S.448.では信仰の問題として、宗教的人格にとっての神に言及し、それをWertrealitätとして定義している(Vgl. F S. 211, Anm. 非理論的には有意義な神を「現実的な神」と呼び、理論的認識の外部に据える)。それに関連することがらとして、『認識の対象』で、ほぼ一箇所、eine transzendente “Wirklichkeit”(C S.243.) / eine “transzendente Wirklichkeit”(D S.454.)は、通常の認識論での使われ方とはちがう、という断り書きがあり、実際、第三版以降「超現実的なもの」と言い換えられる(宗教哲学への言及あり)。けだしここでの「超越的現実性」は、形而上学的な存在を指すのであろう。これに重なる用法として、価値実在を「神性」として定義する箇所がある(D S.448. は、接続法第Ⅱ式がとられているので、解釈に含みを残す。ただしD S.361.の価値-実在 [= Wert-Realität] は、形而上学を避けるという、理論的文脈で用いられているので、価値実在の位置価は定めがたい)。背後に別の経験が控える〔つまり他の認識の可能性に開かれた〕現実性に対峙するさい、「神」「神性」に依拠することで、かろうじて妥当への通路が与えられる。

4 純粹実践理性の図式論参照。図式的な描出と区別される象徴的な描出。その判断力は、反省的なそれにも及びKU S.352.聖なる空間での知を指し示しうる。

C. 反省性

宗教的超越を回避する射程を、リッカートの思考に認められないだろう。そこで反省的価値への通路とともにひらかれる、彼の遠近法主義を見てみよう。規定的判断力としての〈説明〉ではなく、反省的判断力としての〈理解〉が、判断力ということで考えられていた。翻って、リッカートの認識論は、排中律を前提に（C S.97.）、価値実在論に近いかたちをとっていた。そうした現象背後（＝実在論的）システムはさて措き、^{マテリアル}質料たる「前科学的概念構成の産物」が現出することになる。それは、〔カウルバッハ流〕遠近法主義⁵的に見るならば、説明／理解というシステムの反映と見なしうる。すなわちパースペクティブのちがいに応じて、存在（現実性）と価値の反映として把握される⁶。そして存在（現実性）と価値を統合するものとして——解釈 [= deuten] される「意味の第三領域」が考えられた。彼の真意を酌めば、現実性と価値とを、それぞれ現象界の説明 [= erklären]／叡智界（価値界）の理解 [= verstehen] に割りふる一種の遠近法が採用された、と言えよう（BP S. 27.）。実際リッカートは言っている。「そうするとあるいは〔価値という〕この非感性的なものが、叡智的なものという名称をもつのは当然のことだろう。というのも、それは理解不可能なまま残る感覚的に知覚可能なものと異なり、理解可能なものであるからである」（MK S. 164. 傍点は原文ゲシュペルト）。

理解概念の解釈学的展開から明らかのように、部分に対する全体の先行的理解（これについては九鬼 2014、第二章第二節（2））が発動する。全体的な価値のもとに、存在（現実性）が部分として囲われる。理解が存在

5 カウルバッハによれば、遠近法とはカントにおける対象を考察する二つの視点、すなわち現象と解するか、物自体そのものと解するかという二途であり、理性的・超越論的に、これら両立可能な二つの視角から認識がなされるとする。このカント理解は、リッカート解釈の導きの糸となろう。Vgl. Ch. F. Kaulbach 1990.

6 「だが判断の別の権原、つまり諸関係や諸定在という所与存在は当為というものにまったく関与しない。それが判断必然性の根拠であるかぎり、所与に基礎を置く必然性は当為必然性ではない」（LW S.277.）。内在的な存在システムに判断必然性が依拠しているという示唆を、デイルタイのリッカート批判（LW）からえられる。

のレベルを超越した領域を先取りしたのちに、内在的な意味の領域に立ち戻る。そうしておのれの解釈に回帰する。この自己超越、そして回帰への力動は、経験の拡大に対応する時間的超越の軸と重なるであろう。「いやしくも主観が「客観的に」認識するというなら、主観は、それとは独立の客観とつねに対峙せざるをえない。かように理論的観照は、……完全な終結に決していたりえず、むしろそれが把握せんとする質料から、特有のあり方で疎遠なままである。学のほかに、この観照的で非人格的かつ非社会的な、非-終結的全体という組、すなわち未来財という組に属するような形象がなお存するかという問い、あるいは考えつくかという問いは、ここで等閑に付せられる」(SW S. 308.)。ここで認識は、実践的に転換されることで、総体性を意欲するかのようにも見える。こうした脱形而上の超越⁷の構造が、経験の可能性の奥行きを炙り出す。

二、現実と可能／価値論

学知の体系は主知主義的な独断論を意味しているのではないか。これに対しては、『判断力批判』の構図をもって答えることができる。現実性が規定的判断力にしたがって、普遍から特殊にいたるのに対して、価値は反省的判断力にしたがい、特殊から普遍にいたる。言い換えれば、前者は、『純粹理性批判』で自然の法則的認識を与えるのに対して、後者は、『判断力批判』で美感的判断力・目的論的判断力を率いて、趣味判断から歴史・文化の意味解釈を可能ならしめる。

A. 自律性

リッカートは学的営みのなかに、『判断力批判』的な非合理性をとり込もうとした。「実際ここ『判断力批判』」で彼自身は非合理的な要素を力

7 デイルタイは、超越は畢竟存在の関係から派生するがゆえに、当為に適用できない概念であるとする (LW S.275.)。リッカート自身は、後に修正するように、当為ではなく、意味(実在的カテゴリー?)を超越領域に指定するようになってゆく。

説し、しかも概念的鋭さをもって示している。それは厳密に学的な哲学者といえどもなんぴとも、カントほど根本的には成し遂げられなかったことである。そのかぎりでは『判断力批判』はカント主要著作中で、最も近代的な著作である」(MK S. 180.)。ここで情感的なものに目を向けておく必要があろう。表象と意欲にくわえて、意味に即しつつ、「第三のものとして「感情」を付けくわえるという考え(中略)ははっきりとしている」(MK S. 168.)。こうした反省的情感は、身体性とはちがう文脈での価値の射程をひらくにちがいない。

『判断力批判』第一部第一編第四〇節参照の箇所、総体的な人間理性を参照するアプローチとして、三つの格率について言及していたことが思い起こされる。一つ目は「自分自身で考える」ということによって、偏見から解放されるべきこと。行為者相関的な思考／行為者中立的な思考にわたる、能為者性つまり〈エージェンシーのあり方〉が反省される。二つ目は「視野の広い考え方」をして、拡大された思考法をとるべきこと。行為の選択肢を可能的に拡大することにつうじるこの見方は、非帰結主義と接点をもつだろう。三つ目「首尾一貫した考え方」。すなわちこれは思考の態度が整合的であるということである。コーヒアランシーという規範が課されるわけである(KU S. 294-295. § 40. 解釈の前提となる非帰結主義解釈については別稿を参照のこと)。リッカートの思考水準もおおむね、主観的原理の自己回帰性によって枠づけられていた。これら主観的原理は、カント的反省的理性の統制的原理を指し示している。そのことは以下の行文によって確かめられる。

特殊から普遍にいたる反省的判断力の統制的原理ということで、さしずめ注目したいのは、『判断力批判』における自己自律の論点である。長くなるが、引用の煩をとろう。

「……このように自然の諸形式と自然諸概念とは、きわめて多種多様であるから、これらの形式や変容の〔規定の〕ためにもやはり諸法則がなければならない。こうした諸法則は、経験的諸法則としてなるほど私たち〔人間〕の悟性の洞察にしたがえば、

偶然性であるかもしれない。しかしそれでもこれらの法則は、法則と呼ばれるというならば（これは自然の概念の要求することでもある）、たとえ私たちには未知であるとしても、多様なものを統一する或る原理にもとづいて、必然的であると見なさなければならぬ。——自然における特殊なものから普遍的なものへと上昇することを本務とする反省的判断力は、それゆえ或る原理を必要とする」。私たちの悟性にとどまるかぎり、普遍性には経験的個性を、理想的に秩序づけるよう、反省的判断力は統制する。「それは、この判断力が経験から借用することのできない原理である。なぜなら、この原理は、すべての経験的諸原理が、均しく経験的ではあるが、いっそう高次の諸原理のもとで統一されることを基礎づけなくてはならず、それゆえこれらの経験的原理がおたがひ体系的に従属する関係となりうることを基礎づけるべきだからである。それゆえ、反省的判断力は、こうした超越論的原理をおのれにのみ、みずから法則として賦与できるのであって、ほかからこの原理を採用することはできず（さもなくば、判断力は規定的判断力ということになろうから）、またこの原理を自然に対して指定することもあたわぬ。なぜなら、自然の諸法則に対する反省は、自然にしたがうのであって、また自然は、私たちがこれら条件に関して完全に偶然的な自然の概念をそれに即して獲得せんと努めるような諸条件に、したがうことはないからである」（KU S. 179-180. 序論IV. 傍点は原文ゲシュペルト）。

反省的判断力はこうして、自然を構成する原理とはなりえぬ。規則を指定するものでも、自然から借りうけてくるものでもない。自然が経験に示す多様性は、悟性にとって偶然性であるにもかかわらず、あたかも私たちのものではない悟性が、特殊で多様な経験的な自然法則にいたるまで、秩序づけているかのように、反省的判断力は〔その多様性を〕とり扱わなければならない。だがその悟性は私たちのものではないから、反省的判断力は、自然に対して構成的に働きえず、しかもみずから自身にのみ法則を賦与するということになる（KU § 31. 主観は他から力を借りることなく、おのれの趣味に即して自己統制する）。反省が反省自身を見守るのである（自己回帰性）。熊野（熊野 2017、101-102頁。）から要をえた解説を引いておこう。「判断力はここで自然を考察する主体へと回帰してゆく。判断力は

かくして反省的となり、認識能力そのものに対して、反省的な関係を結ぶものとなる。反省的判断力はみずから自身を原理として、みずからに由来する原理をみずから自身に対して措定する。反省的判断力は、自然を反省するためじぶん自身へと還帰してゆく。その意味で判断力は、それが反省的に作動する場合「自己自律Heautonomie」(KU S.186.)という構造をとまっているのである」(傍点は原文強調)。リッカートは生の意味領域に、自己回帰的解釈、ひいてはその統一性を要求する。「多様な生はすべてを関連づける中心にかかわらなくてはならない。この統一の原理は、価値体系に欠くことのできないものであり、それは解釈の根底に存していなくてはならぬ」(SW S.299.)。こうした原理が統制する価値体系が構想される。

B. 現実性

ここでリッカート哲学の完結性という問いに出会う。価値判断の非完結性といっても、彼は哲学に「完結性という」完備性を要求していたのではなかったのか(内在的綜合)。とりわけ価値体系は、世界観が顕われる〈この生〉を、あらんかぎりトータルに把握しようとする(世界観学の構想)。その体系の完結性もまた、学への固執を露呈しているのではなからうか。つまり、いびつな学的合理性を墨守しようとしているのではないか。このことがらを価値の対立に照らし合わせてみよう。

「近代文化は相互に逆らい合う諸力によって支配されている。それゆえ近代の文化意識は、ヘーゲルの言葉を借りれば、「分裂」の性格を有している。だがそれについて思い違いをしてはならぬ。また統一の欠如が問題の本質にあると誤解してもならぬ。そこで、いかにしてさまざまな文化領域の独立性と固有の意義とが、文化全体の統一性と結びつけられているのか、という難解な実践的理論的問題が生ずるのである」(MK S.121.)。

リッカートにとって、文化の統一性の把握が焦眉の課題となっている。

「むしろ文化全体を、そのあらゆる部分から総括が把握することが有効である。したがって哲学は、その対象を、さまざまな部分局面のことごとくに即してとり扱わなくてはならない。現代文化の場合、哲学はその特殊

領域である個々の領域について、意義を正当に評価しなければならない。この目的のために、特殊な各文化因子を、一つの統一的全体へと総合する把握について考える前庭として、さしずめ文化の多様について本質的な差違をすべて明らかにしなくてはならない」(MK S.126.)。

価値関係的な個体概念を構成するさい、原理となるのは、包括的価値体系である。価値体系は、「財」つまり〈価値を付帯した現実性〉を与件とする。二者択一的分類は、物件を財とする観照的価値と人格を財とする活動的価値からなる。前者は真・美・非人格的聖の価値であり、後者は善・愛・人格的聖の価値である。個体は、これら価値体系を使って解釈され、多元的な位相にわたる独自の個性をもちえるのである。

	無限的全体	有限的部分	完結的全体
観照における	真・	美・	一元論的聖
活動における	美・	愛・	多元論的聖

「理論的価値の領域にとどまらず、非理論的〔実践的〕価値の領域でも、内在的意味は超越的価値を前提としてのみ解明される」(九鬼 2014, 69頁.)。これにもとづき、多元的な価値体系が提起される。——ここで現実的な総体性を産出する多元的な価値領域の一例として、美と愛の領域に注目する。美や愛という価値は、その現在財 (SW S.303/SP S.380) が、それ自体としてみれば現実態的な完成に到達しており、可能的な未来財 (SW S.302/SP S.380) の価値よりも高いとされる。そのことは芸術制作をお手本に、ギリシアの造物論を特徴づけた、ハイデッガーの解釈に示されるとおりである。ミメーシスがアリストテレスの哲学において占めた位置を思い出してもよい。

現在に定位するとき〈愛〉という傾向性もひらける (リッカートの本意からずれるが、以下の記述では、生価値としての愛の比重が大きく占める)。しばしば、この〈愛〉の領域は、第二の自然のなかに現われる。近代化に伴う世俗化が、倫理の脱人称化に抗して〈愛〉をもち込むのである。そうした世俗的欲求や利害の前で、公平性を保証しえないという〈経済的〉事

実に直面する。——かくのごとく成立する〈経済的〉価値について、カント学者コースガードの言うように、手段としての意味を与えうるのではありませんか。それは外在的価値である以上、「目的」でありながら、「手段」のなかにも組み込むことができる。逆に言えば「目的-手段」連関に依じて、経済的価値は、「目的」にもなりうる⁸。それは、「外在的手段」の派生形態として捉えられる。コースガードが展開しているのは、まさに経済活動で中心となる「交換価値」に現われる、第二の自然である、そうした価値的な要素に言及したものと考えられる。

コースガードの考察を見てみよう。彼女は「道具、お金、小間使い [= chores]」（Ch. M. Korsgaard 2004 (←1996), P.250.）の例を出す。万年筆は内在的に善いと主張することはできない。万年筆は筆記のための手段（使用価値）に即して外在的に善いと判断される。ところが、象牙の万年筆であるなら、物象化により目的が自存的に扱われ、高く評価される（交換価値）。象牙の万年筆が高価なことは、第二の自然が生んだ「手段」の物象化である。第二の自然は、こうした物象化を通じて、「目的-手段」系列を現在で閉じた体系に拵えあげる（完結せしめるということ）。そのさいA・スミスの〈自己愛〉が介在することで、一種の身最良⁹が帰結する。こうして幸福を扱うリッカートの「非倫理的」な愛の学を指示できる。完結的部分として「目的-手段」系列をなすことは、物象によって世俗的な「目的-手段」系列で完結するということである。リッカートはそれを扱う人間の社会的生存^{ダーザイン}に関して言う、「私たちは完結した現在の生を一つの特殊な領域として画定する場合には、.....人格的で活動的・社会的な生存の価値にのみ、私たちはかかわる」（SW S. 316. Vgl. SP S. 395.）、と。

C. 可能性

カントを指針とする認識論は、感覚に対応した無限の多様を背景に

8 リッカートで言えば、目的に対する手段となる条件価値、すなわち経済的・技術的な文明価値が思い出される。Vgl. Gpr S.168ff., 182f.

9 「愛の学」が「幸福」を主要価値としていることから、経済的領域との連関は明らかであろう。

抱え込んでいる。「悟性はみずからの領域の限界を絶えず踏み越え……、妄想と幻惑に迷い込む場合には叱責を受けなくてはなるまい……」(KrV. A S.238./B S.297.)。ここに弁証論的な構えを認めうる。弁証論の場面でカントは、無限の経験に対峙したが、それに対して、汲めども尽きぬ認識の多様を捌いているのが、リッカートである。与えられたものは見とおせない。全体は時間的有限者との関係において、理念であり課題である（このことは主体に対して、課題という関係的性質をもって現われることを意味する）。つまり「この命題が、有限者に対する真理性の承認を促す」なら、「この命題は、有限者であるxにとって、真理性の承認を促すような対象である」。前者が命題のもつ自体的な価値を表わすのに対して、後者はxとの関係にもとづく関係的価値（性質）を表わしている¹⁰。

無-限的全体 (SP S.379./SW S. 302.) を主題とする認識は、人間が有限性を自覚することで、関係的価値としては卓越性をもつ。このシェーマに対応して認識は、主体にとっては可能態にとどまる「汲みつくしえない全体」(SP S.378./SW S.302.) へと向かう。

認識と並び立つ倫理的領域では、——認識と同じく、承認・拒斥というかたちの価値判断を、みずから選びとる構造を採用している。倫理的な Faktum は——客観的な命題価値をベースとしつつも、二次的に解釈されるのだから、一種の自律により規定されうるだろう。だからそれは、「何はともあれ、自由意志に則した「法則」にしたがう「自律的」人格性の義務自覚的な意志にとって、倫理的領域となるのである」(SW S. 311. Vgl. SP S. 326, 392.)。このことは、抑止意志という善意志に背いて、なお悪を選びとりうる可能性を指示する。選びとった悪にあらがいがながら、なお善を意志するという構造に、——〔悪という〕傾向性をなお否定する善意志に「可能なかたち」を見定めることができよう。そもそも、人間にとって義務づけられていることが、可能でなければ、倫理的価値は無意味となる。ここに措定されるのは、有限者にとっての、理想的善価値に定位する無限

10 柏端2017、173頁以下を参考にした。

性である。最終的なテロスとしての神性を目指して、私たちは道徳的改善の努力を無終結的に続けることになろう。そのテロスの仰望が人間の時間的有限性¹¹に対する、関係的価値としての、道徳の卓越性をかたちづくる。これと対応してリッカートは言う、「倫理的という点では際立った〔この倫理的〕全領界も、同程度に汲めどもつきない」(SW S.312-313. Vgl. SP S. 393.)、と。

こうした系列の最終審は、倫理を裏打ちする『宗教論』に求められよう。すなわち、宗教は価値的に認識や倫理のよりどころとなる高次の原理である。だが有限者にとって、その価値的な完結は望みえない。現実的にも可能的にも有限者には完結はない。それゆえ言われる、それを付帯するのは永遠財 (SP S.378./SW S.303.) である、と。聖は、みずから超越したものの自身が超越で自足する。そこへといたる有限者の通路は限りなく狭い(象徴とはカントにおいてもカッシーラーにおいても、はたまたフーコーにおいても、そうした通路を掠めとることではなかったか)。かくして完-結的全体としての最高価値は、人間には到達できない現実性と可能性の総合である。形而上学的完成は、条件づけられた〔有限者の〕諸目的の系列にそれ自体、属しているとは考えられないから。あるいは、それ自体において必然的全体¹²の様相を帯びているのかもしれない。

「この〔活動の締め括りをかたちづくる〕宗教は、生が個人の部分的な力からは育みえない価値を生に与えることによって、現在および未来の生を支え、確たるものとする。永遠なるものが時間的なものへ、神的なものが人間的なものへ、絶対的なものが相対的なもの [= das Relative] へ、完-結的なものが終結のない有限的なものへ、人格の全体が部分へともち込まれるのである」(SW S. 320-321. Vgl. SP S.400.)。

11 善と悪の無限の隔たりに関連してカントは言う、「この隔たりに時間的ななかでは追いつけないのである」(Rel S.66.)。

12 「その者にとっては時間的規定が無であるような無限な者は、私たちにとっては果てのないこの系列のうちに道徳法則との適合の全体を見出す」(KpV S.123. Vgl. Rel S.67.)。

学知・観照的聖も含めて、真・善・美・聖という多元的価値は、このようにことさらに即して配列される。聖において超越的綜合を見るこの価値序列は、人間の完結の傾向という導きの糸によって見とおしをえているのである。

三、開いた体系／生動性

価値の相克のもとで実践的命法は期待できないのではないか。もしくは、固定した体系はいかにして形而前的領域を掬えるのか。これがリッカートに課せられた問いであった。

・カント

リッカートは、カントの反省的判断力をなぞりつつ、普遍への起点を特殊に置いた。反省的に探究される特殊的個体とは、技巧の産物である。そこで、情感につうじる価値把握が、個性主義と手を結びあう。——私たちは、一面的でかけがえのない個体概念を、論理的には完結しない営みのなかで構成してゆく。そのさいカントの反省的判断力をなぞりながら、特殊から普遍へとたどることになる。

こうして、かけがえのなさという個性主義的価値が担保される。「もちろん一回かぎりの、とり替えがきかない個体の概念は、カントの美学にかぎって、その正当性を有しているが、体系の他の部分では、本来ならば果たすべき役割を、いまだに果たしていない。……そこでカントの概念を使って言えば、——カントはきっと反論するだろうが——芸術においてのみではなく、文化の他の領域においても「天才」は存在する。天才は、個体として人生に超個体的規則を与え、——その規則が普遍的概念で表わされることなく、それゆえ合理化されずに——、カントの意味で模範的な、すなわちその一回的個性によってあらゆる人に対する意義を獲得する人格性である。このことを理解すれば、現代文化の広範な領域における〔個性的な〕非合理性も、その固有の意義において哲学的に理解することは難く

ない」(MK S. 185-186. 傍点は原文ゲシュペルト)。ここに歴史的な中心となる人格性の個性的価値が示唆されている。

個人主義をつらぬくことから、多元的な諸価値へのコミットが生じる。価値体系は全文化領域を統括するが、各人は羅針盤としての個々の価値観からデータを解釈し、関係する価値を索出してゆく。そうした多元的価値準拠を背景としつつ、イデアールな諸価値は、レアルな現実性を予期する。歴史的変転のなかで現われる諸価値は、レアルなものに受肉しなければならない、そうして合理的契機が経験的-非論理的契機を抱懐する。だから広義の価値とは、質料に対しても開かれた「形式-内容形象」である。「実際言うならば、世界観学としての哲学の本質は、それが閉じた体系、すなわち完結的部分という形式をもつにもかかわらず、やはり終結なくさらに展開するところにある」(SW S. 325. Vgl. SPS. 410.)。

・ディルタイ

リッカートのやや性急なディルタイ批判の不当性が指摘されることがある。すなわちディルタイを体系への意志の欠如において批判することにより、その生のトタリテートを見誤った、と。しかしリッカートがニーチェを批判して言う、「いっさいの真に包括的な哲学は、私たちすべてを包括する生の哲学でなければならぬ」(PhL2 S. 181.)のごとく、リッカートにもトータルな生を探究する思索が見出される。

晩期ディルタイの価値哲学(1905年から1910年頃まで)に注目できる。わけても知覚に棲みこんだ基本的論理操作が、価値論と並行して論じられている。それに先立つ記述心理学の諸想・比較心理学において、彼は仮説を定立せず全体を把握するものとして、基本的論理操作を位置づけていた。そこでの心的構造は、客観的に表現されることで、「いかなる仮説的推論も含まず、ただ単に分析と解明という基本的論理的操作だけを含む」(マックリール 1993、325頁。)とされる。——ディルタイは、この時期における心的生の規則性を、第一に心的構造と呼ばれる、心的生の「連関への帰属性や生動性」と、第二に同型性と呼ばれる、「連関への非生動性や外面性」

とに区別する。たんなる仮説である後者、説明的斉一性から前者は区別され、——仮説を用いることなく、その心的構造の記述によってのみ、精神科学の固有の認識論の基礎が与えられる。それは基本的論理操作によって把握される。

この点にかかる背景に触れておけば、——上島 2006の概説に依拠すると——基本的論理操作は、中期ディルタイでは知覚における思考を指していたのに対し、後期では知情意のそれぞれに内在する思考を指すようになり、それは価値論へと引き継がれてゆく。つまり心的生の連関へと心理学的にアプローチする管制高地となる。感情的生・衝動的生はより高次で、抽象的な洞察へと高まり、概念連関を獲得することによって、価値へと上昇する（LW S.31. Vgl.価値は感情から成立 LW S.277.）。それを「経験する思考」とディルタイは呼ぶが、非方法的な生の経験が生の限界に突きあたることで、方法的な性格（LW S.32.）をえてゆく。「経験する思考」は基本的論理操作として、比較、一般化、抽象化するとともに、個別価値を価値体系全体へ内的に関係づける。「経験する思考」の目的は、普遍妥当の性格をもつ内在的生価値の体系、ないし私たちの外部に横たわる客観的価値の体系である（LW S.32.）。

価値の客観性に言及するものの、ディルタイの立場が、発生的な生の見地に立つことを忘れてはならない。ディルタイは、主観が内在的存在を構成する概念であるとするリッカートを斥けつつ（LW S.274.）、主観を実在的なもの（判断意識はそれ自身客観である LW S.273.）として呈示する。価値判断によって客観化される現実性（LW S.273.）と実在的主観の間に成り立つカテゴリーが、価値カテゴリーである。すなわち、生のさまざまなあり方についての〈価値づけ〉によるかぎりで、自己に関係づけられたものにおいて存立する¹³。このようにリッカートを批判しつつ議論を組み

13 ディルタイは、判断が個々の定在＝実在、もしくはその関係の定在についての言表作用である（LW S.276.）として、実在論的な立場を明らかにしている。彼に言わせれば、真理とはそうした連関のうちでの内在的法則性（LW S.279.）である。それと符合して、真理が意識の彼方に妥当する領域は、何らかの意味で実在性をもた

立てるデイルタイにとって、生は実在に根をおろしており、そこで生成する価値を看取するのが、基本的論理作用なのである。そうした——たんに知性的ではない、生の把握が見出す——生動性に、リッカートの、文化主義的な或る種の限界に対する、一つの代替案を見出せるかもしれない。というのも、彼は生のなかに、哲学にとっての前段階しか認めなかったからである（PhL2 S.49.）。しかも超歴史的真理を奉ずる彼は、変転に対する感受性の鈍さに余りある。だがしかし、リッカートの合理性とは、学的に硬直した普遍主義に立つものではなかったことを、今一度確認しておく必要がある。

・ハイデッガー

カント的な反省的情感は、リッカートにおいても生の全体に根ざす有限性を指し示す。それゆえ世界観学が完結を意欲し、包括性へにじり寄ろうとしても、所詮、開かれており、非完結的なのである。こうして価値を帯びた現実、コンティンゲンツとかかわらざるをえない。例えばオルトを要約すれば、「生の現場たる「意味の第三領域」に関連して、生ないし体験の言表可能性の論議は、さらに〈個別科学の討議〉対〈世界討議〉という問題圏に拡大してゆく。リッカートにおける非論理的な現実が抱えるコンティンゲンツの問題は、理論的な関心をも有した実践的人間に、このうえもなく慎重なとり扱いを要求するであろう」（E. W. Orth 1998, S.91.）と言われる。もしくはコンティンゲンツとして生の時間的構造、有限存在の終結（完結）にいたる存在と、死に臨む可能性のひらけを思い起こされるかもしれない（ハイデッガー）。だがデイルタイ的にリッカートを解するとすれば、この偶然的な有限のとり扱いは、ロゴス中心でない可能性¹⁴を指し示しているのではあるまいか。死を終結という可能性と同定しないリッカートにおいては、完結の挫折が先取りされている。つまり現をロゴ

なくてはならない、とデイルタイは言っている（LW S.279.）。

14 リッカートに主知主義を認める論者としてはS. Griffioen 1998 S.70. それに対する異論としてはM. Signore 1994 S.408. Vgl. Gpr S.8.

スの明るみとできないゆえに、そのコンティンゲンツは合理性の限界を刻印しているのである (E.W. Orth 1998, S.91.)。コンティンゲンツとは、特定の経験との間の適合関係において生じる偶発性のことである。リッカートがそれを論じるにあたり、経験を包括的に説明できる普遍主義は否定される。ここで改めて多元的個性が完結しえぬことは、合理性の限界であると同時に、反省によって鍛え直されたしなやかさを、ありうべき合理性の射程として刻みつけている。認識論の論理的無底とは、さらに「開いた体系」とは、有限な人間のもつ眼差しにつうじていたのだった。

オルトの論点ではあるが、二点補足すべきことがある (以下ポイントを下げた部分)。一つには現実性、すなわち異質的連続という論点である。さらにもう一つの点として、前科学的な形而前的世界こそが、意味作用体験の実相であった。

或るものは他のものを要求するという相關主義的な原理にもとづき、形式は質料を剰余として予想するが、絶えずその剰余は悟性的裁断を追い越してゆく。そうした追い越しの構造たる異質的連続が、非完結の場にコンティンゲンツとして顕われるのである。リッカートはレアルな〈異定立〉に言及しながら、直観の多様から演繹を行う。分析の端緒を、個々の具体的な主観*i*による、直観の多様*a*についての肯定判断に置く。リッカートにならうのなら、主観*i*は*a*をperceptio知得する。このレベルでは、〈多様〉は、たんに「与えられたもの」として措定されているにすぎぬ。彼は、意識内容中、原初的な現実性として〈多様〉を考えている。この「知覚」(もしくは直観)に即した現実性は模写によってくみ尽くせない (KN2, Kap.V. 内容が現実的なものとされる。Vgl. D S.209.)。学問分類論にわたる批判に言及しつつ、ディルタイは、次のように生の前科学的現実性を高く評価していた。「リッカートの現実科学とは歴史学のことであって (Vgl.Grenzen1 S.327からの引用)、それは、普遍的概念を扱う自然科学とちがっている。それゆえリッカートは自然科学を勝義の学問とはしなかった」(LW S.286.)。「異質性と連続性との結合」を説く、『文化科学と自然科学』第二版のくだりを引こう (Vgl.Grenzen1 S.34./Grenzen2 S.32.)。「連続は、それが同質なら即座に概念によって支配されうるし、異質なものは、私たちがそれを載り出すとき、つまりその連続性を

非連続性へと変化させるとき、理解されうる。こうして学問には、その途として二つの概念構成もまた、明らかとなる。私たちは、現実性すべてに挿し込まれている異質的連続を、同質的連続か、もしくは異質的非連続に変形するのである」(KN2 S.33.)。リッカートは、こうした前科学的な生に着目していた。そうした偶発性を孕んだ前概念的＝形而前的領域から、後退することはできなかった。

結び

「理論的に洞察せねばならぬことは、一方で生の究極的な目標や理想を理論理性のみによって測れないこと、ゆえに例えば、最高の徳性と敬虔さを、それらに適合する認識と合一せしめることの不可能性である。にもかかわらず、他方、学によって限界づけられた領域内での純粹に理論的な態度は、不可侵の意義を有しているのである。こうした価値前提がないのなら、現代文化の総体性を何にもとらわれずに観察し、そして普遍的に手続きをとる哲学の課題とはいかなるものか、をあらゆる側面にわたって学的に理解することは覚束ない」(MK S. 143. 傍点は原文ゲシュペルト)。

この論攷で見てきた多元的価値には、体系への意志が認められる。すなわち総体性への意志である。その努力と蹉跌を、リッカートは完結への傾向と呼んだのであった。傾向として「すべての評価主観は、財というかたちで価値現実化に到達すべく努力するかぎり、この努力の終結を志向するものである」(SP S. 377. Vgl. SW S.301. 傍点は原文ゲシュペルト)。

世界における人間の位置を観望する世界観学 (SP S.36.) を構想するリッカートは、総体性を現実性次元・可能性次元に拡張する。その一方で、その限界を「開いた」性格によって徴づける有限的な価値体系は、果たして反省によってしなやかに鍛えられていなかったか。これはリッカートの問題であると同時に、私たち自身の問題でもある。

追記：本論文は、JSPS科研費20K00119の助成を受けたものである。

文献

- Dilthey, Wilhelm: *Logik und Wert, Späte Vorlesungen, Entwürfe und Fragmente zur Strukturpsychologie, Logik und Wertlehre (ca. 1904–1911)*, in; *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B. G. Teubner/Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2004, Bd. XXIV. →略号 LW.
- Gabriel, Gotfried & Schlotter, Sven: “Von der Abbild-zur Anerkennungstheorie der Wahrheit / Frege im Neukantianismus”, hrsg. von Kublica, T., *Bild, Abbild und Wahrheit, von der Gegenwart des Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen und Neumann, 2013, Bd. 30, S. 23–39.
- Giugliano, Antonello: “Antimetaphysik des Wertes: Zu einem philosophischen Abschied von Heinrich Rickerts Denken”, in; *Methodologie Erkenntnistheorie Wertphilosophie: Heinrich Rickert und seine Zeit*, hrsg. von Donise, A., & Giugliano, A., & Massimilla, E., *Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 2016, Bd. 37, S. 63–72.
- Griifoen, Sander: “Rickert, Windelband, Hegel und das Weltanschauungsbedürfnis”, in; hrsg. von Krijnen, C. & Orth, E.W., *Sinn, Geltung, Wert, Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 1998, Bd. 12, S.57–72.
- Hessen, Johannes: *Die Religionsphilosophie des Neukantianismus*, London: FB&Ltd, 2015 (←2019).
- Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*, in; hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, 1904 (←1781A/1787B), Bd. III/IV. = 有福孝岳訳：『純粹理性批判 上・中・下』『カント全集』岩波書店、2001–2006、第4～6巻。→略号 KrV.
- Kant, Immanuel: *Kritik der praktischen Vernunft*, in; hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, 1908 (←1788), Bd. V. S. 1–163. = 坂部恵／伊古田理訳：『実践理性批判』『カント全集』岩波書店、2000、第7巻、117–357頁。→略号 KpV.
- Kant, Immanuel: *Kritik der Urteilskraft*, in; hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, 1913 (←1790), Bd. V. = 牧野英二訳：『判断力批判 上・下』『カント全集』岩波書店、1999–2000、第8～9巻。→略号 KU.
- Kant, Immanuel: *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, in; hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, 1914 (←1793), Bd. VI, S. 1–202. = 北岡武司訳：『たんなる理性の限界内の宗教』『カント全集』岩波書店、2000、第10巻、1–272頁。→略号 Rel.
- 柏端達也：『現代形而上学入門』勁草書房、2017.
- Kaulbach, Christian Friedrich: *Philosophie des Perspektivismus*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1990.
- Korsgaard, Christine M.: *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge: Cambridge University Press, pbk. 2004 (←1996).
- 九鬼一人：『オン・デマンド版 新カント学派の価値哲学』弘文堂、2014 (←1989).
- 九鬼一人：「リッカートの〈しなやかな合理性〉—新カント学派と人間の総体性—」、『理

- 想』第703号、2019、48-57頁。
- 熊野純彦：『カント 美と倫理のはざま』講談社、2017。
- マックリール、ルードルフ A. 著／大野篤一郎 [ほか] 訳：『デイルタイ：精神科学の哲学者』法政大学出版局、1993。
- 中島義道：『カントの読み方』ちくま新書、2008。
- Orth, Ernst Wolfgang: “Leben und Erlebnis bei Heinrich Rickert. Zur Frage der Kontingenz im Neukantianismus”, in; hrsg. von Krijnen, C. & Orth, E.W. *Sinn, Geltung, Wert, Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 1998, Bd. 12, S.75-91.
- Rickert, Heinrich: *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1896-1902¹. →略号 Grenzen1./1913². →略号 Grenzen2.
- Rickert, Heinrich: “Geschichtsphilosophie”, in; hrsg. von Windelband, W., *Die Philosophie im Beginn des 20. Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer*, 1Aufl., Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1905¹, S.51-135. →略号 GPh.
- Rickert, Heinrich: 2. umgearbeitete und vermehrte Aufl. I., *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1910. →略号 KN2.
- Rickert, Heinrich: “Vom Begriff der Philosophie”, in; *Logos*, 1910, Bd. I, S.1-34. →略号 BP.
- Rickert, Heinrich: “Vom System der Werte”, in; *Logos*, 1913, Bd. IV, S.295-327. →略号 SW.
- Rickert, Heinrich: *System der Philosophie, Erster Teil: Allgemeine Grundlegung der Philosophie*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1921. →略号 SP.
- Rickert, Heinrich: *Philosophie des Lebens*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1922². →略号 PhL2.
- Rickert, Heinrich: *Kant als Philosoph der modernen Kultur. Ein geschichtsphilosophischer Versuch*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1924. →略号 MK.
- Rickert, Heinrich: *Grundprobleme der Philosophie, Methodologie, Ontologie, Anthropologie*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1934. →略号 GPr.
- Rickert, Heinrich: *Der Gegenstand der Erkenntnis*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1904². →略号 C. in; *Heinrich Rickert: Sämtliche Werke*, Bast, R. A. (Hrsg.), Berlin/Boston: De Gruyter, 2018, Bd. 2/1. →略号 Bast版全集Bd. 2/1.
- Rickert, Heinrich: *Der Gegenstand der Erkenntnis*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1915³. →略号 D./1928⁶. →略号 F. in; *Heinrich Rickert: Sämtliche Werke*, hrsg. von Bast R. A., Berlin/Boston: De Gruyter, 2018, Bd.2/2.
- Rickert, Heinrich: *Die Logik der Prädikats und das Problem der Ontologie*. Tübingen: J. C. B. Mohr, 1930. →略号 LPr. in; *Heinrich Rickert: Sämtliche Werke*, hrsg. von Bast R. A., Berlin/Boston: De Gruyter, 2020, Bd. 1, S.221-467.
- Signore, Mario: “Philosophie zwischen Erkenntnistheorie und Weltanschauungslehre”, in; hrsg. von Orth, E.W., & Holtzhey, H. *Neukantianismus: Perspektiven und Probleme, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, 1994, Bd. 1. S. 485-500.
- 上島洋一郎：「デイルタイにおける基本的論理操作の役割」『デイルタイ研究』、2006、119-135頁。